

叙事詩の宗教哲学
—Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XXI)¹—

茂木秀淳 社会科学教育講座

[244 章]²(D.252 章, C.9088-9100, K.258 章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) 対のもの (dvandvāni)、利益と義務を求め³、解脱の知識を得ようと願う弟子は、徳ある話し手によるこのかつての偉大な話を聞くべし。
- (2) 虚空、風、火、水、五番目として地、そして有と無 (bhāvābhāvau) と時 (kāla) は、五種の (元素からなる) 存在物すべてにある。(Cf.MBh.XII.231.25, 267.9)
- (3) 虚空は内を本性とする⁴。それからなる感官は耳である。身体についての聖典の規定を知る者は⁵、その属性 (guṇa) は音声であると知るべし。
- (4) 運動 (caraṇa) は風を本性とし、呼気、吸気はそれからなる。その感官は触感 (sparśaṇa) はであり、接触 (sparśa) はそれ (風) からなると知るべし。
- (5) そして⁶消化と照明は火 (jyotis) である。目はそれからなり、その性質は色であり、本性上暗闇 (tamas) に付着されている⁷と知るべし。
- (6) 湿気、微小さ、油性は水であると示されている⁸。その感官は味わうものである舌である。水の属性は味であると考えられる。
- (7) 地の要素 (dhātu) は凝集 (saṃghāta) である。それは、骨、歯、爪、髭、体毛、頭髪、脈管、筋肉、皮膚である。
- (8) (地の) 感官は香りを認識し、鼻と教示される。そして香りが感官の対象であり、地からなると知られるべし。

¹本稿は『叙事詩の宗教哲学—『Mokṣadharmā-parvan 和訳研究 (XX)—』(『信州大学教育学部紀要』第 103 号平成 13 年 8 月)に続くものである。略号などは前稿に準じ、本稿で用いるものは以下のとおりである。

- Hopkins[Great Epic]: E.W. Hopkins, *The Great Epic of India, Its Character and Origin*, 1901, Reprint Calcutta 1978.
- Hopkins[1902]: E.W. Hopkins, *Remarks on the Form of Numbers, the Method of Using them, and the Numerical Categories found in the Mahābhārata*, JAOS vol.23, pp.109-155, 1902.
- Hopkins[1910]: *Mythological Aspects of Trees and Mountains in the Great Epic*, JAOS, vol.30, 1910.
- Johnston[1937]: *Early Sāṃkhya*, London, 1937.
- Edgerton[1965]: Franklin Edgerton, *The Beginnings of Indian Philosophy*, London, 1965.
- de Jong[1985]: J.W.de Jong, *The Over-Burdened Earth in India and Greece*, JAOS vol.105, No.3, pp.397-400, 1985.
- ゴンダ [1995]: J. ゴンダ『サンスクリット叙事詩・プラーナ読本』鎧淳訳、宝蔵館 1995
- 中村 [1998]: 中村了昭「マハーバーラタの哲学 解脱法品原典解明」(上) 平楽寺書店 1998.

²244 章は Edgerton[1965] pp.285-286 に英訳がある。

³P.,D.: arthadharmāv anuṣṭhītaḥ K. arthadharmānutiḡhataḥ

⁴antarātmakam Cn. antarātmakam avakāśātmakam /

⁵P.,D.: mūrṭisāstravidhānavit K. muniḡ sāsraividhānavit Cn. mūrṭiḡ śarīraṃ tasya śāstraṃ svarūpaprakāśakam vidhānaṃ yad vedāvākyaṃ tadvid, mūrṭisāstravidhānavit /

⁶P. tataḥ D.,K.: tāpaḥ

⁷P. tamo'nvavasitātmakam D. tāmrāgurāsītātmakam K. tamonāśakam ātmavān

⁸K. はこの後に以下の行を挿入している。

asrī majjā ca yac cānyat snigdham vidyāt tadātmakam /

- (9) それぞれ後の(元素)には、(前の)性質がすべて存在する。後の(元素の)性質はすべて(の元素?)に存在する⁹。尊者(muni)は、五種の元素の集合の流れ(santati)を知る。
- (10) これらにとって九番目が思考器官(manas)、十番目が認識器官(buddhi)であると伝えられる。十一番目が内我(antarātman)であり、すべてのものより¹⁰上位であると言われる。(Cf. Hopkins[Great Epic] pp.169-170, Eleven Modifications)
- (11) 認識器官は決定(vyavasāya)を本性とし、思考器官は区別(vyākaraṇa)を本性とする。行為からの推理によって、領地(kṣetra)という名の個我(jīva)が認識されるべし。(Cf. Hopkins[Great Epic] p.169, Eleven Modifications; Johnston[1937] p.45, jīva-kṣetrajña)
- (12) 時を八番目とするこれらすべての状態によって¹¹つき従われた一切を汚れなきものと見る英知ある者は、迷妄(moha)に従うことはない。

[245章] (D.253章, C.9101-9115, K.259章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) (粗大な)身体から解き放たれ、微細になった靈魂(sarīrin 個我)を聖典を知る者(ヨーギン)たちは¹²、聖典に説かれた行為(karma)によって見る。
- (2) 日の光が集まると、動き、行き¹³、止まるのが見られるように¹⁴、体から離れた靈魂は、人間を超えたものとして¹⁵(集まらないために見えなくとも)、もろもろの世界を動き回るのである。(Cf. Hopkins[Great Epic] p.174, sūkṣma body)
- (3) 太陽の円が¹⁶水中に像として見えるのと同様に、靈魂を知る者(ヨーギン)は¹⁷(身体の中に)靈魂(sattva)を像として見るのである¹⁸。
- (4) 身体から離れたその微細な存在を、自己に専念し(?)¹⁹真理を知る者(ヨーギン)は、感官を制御して、自らの真実として(?)²⁰見るのである。
- (5) (ヨーギンは)物質(pradhāna)と二種に結合し(?)²¹寝ている時、起きている時もすべて、自己によって考えられたもの、(そして)行為によって生じる塵(rajas)を捨てる²²。
- (6) 存在の本体は²³、夜は昼のように、昼は夜のように、常にヨーガを実修するヨーギンの²⁴意志のもとにある。
- (7) 彼ら(ヨーガを実修する人々)の存在の本体(bhūtātman 個我)は、常に七種の微細な要素(guṇa)によって²⁵随伴され、老もなく死もなく恒常にして(種々の母胎を)動き回るのである²⁶。(Cf. Hopkins[Great Epic] p.173, seven sūkṣmas)

⁹P. sarveṣu cottarāḥ D. sarvasattveṣu cottarāḥ K. pūrveṣu nottarāḥ

¹⁰P. sarvataḥ D.,K.: sa sarvaḥ

¹¹P. kālāṣṭamair bhāvair D.,K.: kālātmakair bhāvair

¹²P.,K.: śāstracetasaḥ D. śāstravedinaḥ N. śāstrajñā yoginaḥ /

¹³P.,K.: gacchanti D. sarvatra

¹⁴dr̥śyamānāḥ N. sūryamarīcikā nibiḍāḥ santyo 'pi sthūladr̥ṣṭyā na dr̥śyante, gurūktayuktyā tu dr̥śyamānās tā evātivispaṣṭam gr̥hyante /

¹⁵P. dehair vimuktā vicaranti lokāms tathaiva sattvāny atimānuṣāni D.,K.: dehair vimuktāni caranti lokāms P. の vimuktā は Vedic の中性複数主格であり、D.,K. は古典サンスクリットの語形としたと考えられる。(Cf. ゴンダ [1995] p.247, No.10)

¹⁶P.,D.: tāpaḥ K. tāvat N. tāpo raśmimaṇḍalam /

¹⁷P.,K.: sattvavāms tu D. sattvavatsu Cv. sattvavān jñānasattvavān / sattvaṃ jīvarāśitam / N. sattvavatsu jīvavaddeḥṣu /

¹⁸P. prapaśyati D.,K.: sa paśyati N. sa yogī paśyati /

¹⁹P. sattvasthā D.,K.: sattvāni Ca. sattvasthāḥ ātmaniṣṭhāḥ /

²⁰P. svena tattvena tattvajñāḥ D. svena tattvena tattvajñāḥ K. tena tattvena tattvajñāḥ

²¹P. pradhānadvaidhayuktānām D. pradhānadvaidhamuktānām K. pradhānadvaidhayuktānām

²²P.,D.: jahatām karmajaṃ rajah K. dahyate karmajaṃ rajah この jahatām は次の詩節の yogayoginām を修飾すると思われるが、修飾句が長くなるので、切って訳すことにした。rajas の意味がはっきりしない。「心に付着する汚れ」か。(N. rajah kāmādivyasanam Deussen: die aus den Werken entspringende Leidenschaftlichkeit Ganguli: Rajas born of acts 中村 [1998]: 行為の生ずる激情)

²³sattvātmā Cn. sattvātmā liṅgadehaḥ /

²⁴yogayoginām Cs. yogayogininām dhyānaniṣṭhānām /

²⁵guṇaiḥ saptabhis N. saptabhir guṇair guṇakāryair mahadahaṃkārapācātanmātrākhyair Ca. saptabhiḥ pañcabhūtanmanobudhibhiḥ /

²⁶cariṣṇur N. cariṣṇur indrādīlokeṣu samcaraṇaśīlaḥ / Cs. cariṣuḥ nānāvīdhayoniṣu samcaraṇaśīlaḥ /

- (8) この(存在の本体)は、思考器官 (manas) と認識器官 (buddhi) によって支配され、自分の身体と他人の身体を知り²⁷、夢の中での苦楽の認識者でもある。
- (9) (存在の本体は)そこ(夢の中)でもまた苦を得、そこでもまた安楽を得る。そして、そこでも怒りと食欲を²⁸生じて、執着 (vyasana) に至る²⁹。
- (10) 大きな財産を獲得して³⁰、喜びもする。そこ(夢の中)でもまた善行を行い、目覚めているかのごとくに見るのである³¹。
- (11) しかし、タマスとラジャスに満たされた人々は、この光の部分 (atitejo'mśa) として心臓にいる存在の本体を (bhūtātman 個我) を身体の中に見ることはない。
- (12) 聖典に説かれたヨーガに専念し、自分のアートマンを獲得したいと願う者たちは、氣息なき身体、形なき身体、そして金剛のごとき身体 (見る?)³²。(Cf.Hopkins[Great Epic] pp.177-179, kinds of body)
- (13) 生活期の行為 (karma) が別々に四種³³創造されている時に、シャーンディリヤは、ヨーガとはこのように禅定における寂靜であると語った³⁴。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.97, fn.4, Śāṇḍilya recommending Yoga concentration)
- (14) 七種の³⁵微細なもの、そして六つの部分を持つ³⁶偉大な自在神を知って、物質から離れる者は³⁷、は最高のブラフマンに達する³⁸。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.178, sūkṣma body of the spirit)

[246章] (D.254章, C.9116-9130, K.260章)

ヴィヤーサは言った。

- (1) 心には (hr̥di) 不思議な欲望の木 (kāmadruma) がある。それは迷妄の集積によって生じ、怒りと高慢を大きな幹とし、欲知を(木から)解き放つものとしている (?)³⁹。(Cf.Hopkins[1910] p.349, kāmadruma, tree of evil)
- (2) その木の根は無知であり、放逸が水やり (pariṣecanam) である。そして妬みを葉とし、かつての悪行を実としてもつ。
- (3) (その木は) 惑乱と不安とを若葉とし、悲しみを枝とする恐ろしいもので⁴⁰、惑乱をもたらず渴望 (pipāsā) という蔓によって巻きつかれている⁴¹。
- (4) 貪欲な者たちは、果実を手に入れんとしてその大木に近づく。疲労によって抑制され (?)⁴²、ひもで果実を巻きながら。

²⁷ svadehaparadehavit Ca. svadehaparadehavit, na tattvavyatirikātmadarśī /

²⁸ P.,D.: krodhalobhau tu K. kāmam krodham ca

²⁹ P.,D.: vyananam archati K. vyananam r̥cchati

³⁰ P. avāpya ca D.,K.: avāpya hi

³¹ D.,K. はこの後に以下の詩節を挿入している。

ahoṣmāntargataś (K. sadoṣmāntargataś) cāpi garbhatvaṃ samupeyivān /
daśa māsān vasaṃ kuṅṣau naiṣo 'nnam iva jīryate /

³² anucchvāsāny amūrtīni yāni vajropamāny Cn. vajropamāni brāhmaṇapralaye 'py avināśīni kāraṇaśarīrāṇi / Cs. vajropamāny api hiṃsātmakatayā krūrāny api / ata eva amūrtāni, phalarāgavaikalyāt punaḥ śarīram akurvanti /

³³ P.,K.: caturṣv āśramakarmasu D. caturāśramakarmasu

³⁴ P.,D.: śamam abravīt K. samam abravīt Deussen は Chāndogya Up 3.14.1 の参照を指示している。

³⁵ sapta Ca. sapta pañcabhūtanobuddhyākhyāni /

³⁶ ṣaḍaṅgam N. ṣaḍaṅgāni tu 'sarvajñatā tr̥ptir anāḍibodhaḥ svatantratā nityam aluptadṛṣṭiḥ / anantaśaktiś ca vibhor vibhujñāḥ ṣaḍaṅgāni maheśvarasya' iti vāyupurāṇōktāni /

³⁷ P. pradhānaviniyogasthaḥ D.,K.: pradhānaviniyogajñāḥ Cn. pradhānam triguṇātmakam ajñānam tasya viniogo nipaṇāma idaṃ jagad iti jānan / Cv. pradhānasyāntahkaraṇasya viniyogaḥ, tasmin sthaḥ sthiro yogī /

³⁸ P. brahmādhiḡacchati D.,K.: brahmānupaśyati Cn. anu, guruvedavākyaṃ anudhyānena, paśyati sākṣātkaroti /

³⁹ P. vivitsāparimocanaḥ D. vidhitsuṣpariṣecanaḥ K. vivitsāpariveṣaṇaḥ

⁴⁰ P. bhayaṃkaraḥ D.,K.: bhayānkuraḥ

⁴¹ P. latābhīḥ pariveṣṭitaḥ D.,K.: latābhir anuveṣṭitaḥ

⁴² P. āyāsaiḥ samyutaḥ D. āyasaiḥ samyutāḥ K. āyataiḥ samyutāḥ

- (5) それらのひもを意のままにしてその木を引き抜く者は、二種の苦を制御しつつ⁴³、その(二種の苦の)終わりに至る。
- (6) 英知なき者は、苦しみつつ⁴⁴その木を育て、後にその木がその者を殺す。飲まれた毒が病人を殺すように。
- (7) その煩悩を根とする木の⁴⁵根は力づくで引き抜かれる。棄却と不放逸を形とする⁴⁶最高の剣の(ごとき)無関心によって(sāmyena)。
- (8) このようにただ欲望を引き抜くことを⁴⁷知り、愛欲の教義の棄却を⁴⁸知る者は、もろもろの苦しみを超える⁴⁹。
- (9) 『身体は都城である』と言われる。『認識器官(buddhi)が領主である』と考えられる。その場合認識器官にとって⁵⁰、身体の中にある思考器官(mano nāma)というものが管理者(arthacintaka)である。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.166,fn.3, body-city; Manu 7.119-121)
- (10) 感官は都城に住む人々であり⁵¹、「その(認識器官の)ため」が(感官の)最高の行為である⁵²。そこには、タマスとラジャスという名の二つの恐ろしい(dāruṇau)欠点がある。
- (11) 都城を支配する者と共に⁵³都城の人々が生活する目的のためには⁵⁴不適當に(advāreṇa)二つの欠点は振舞う(upajīvataḥ)。
- (12) そこでは認識器官は(感官によっては)近づき難く(durdarṣā)、思考器官は(感官と)共通すると言われる⁵⁵。一方、町に住む人々(感官)は思考器官(業務官)におびえるので⁵⁶、それら(感官)にとっても活動と停止とがある。
- (13) 認識器官が従事している(adhyāste)目的は、認識器官を苦しめない⁵⁷。別に思考器官が従事している目的は(?tat)思考器官を苦しめる。
- (14) 思考器官が認識器官とは別になって⁵⁸単独で(kevalam)存在する場合、この裸になった⁵⁹空(sūnya)(の思考器官?)をラジャスが満たす。
- (15) そのような思考器官はラジャスと親しい友好関係を作って、その都城にすむ者(感官)を捕えて、ラジャスに渡すのである。

[247章] (D.255章, C.9131-9143, K.261章)

ビーシュマは言った。

⁴³P. yatamānas tayor dvayoḥ D. tyajamānas tayor dvayoḥ K. jarāmarañayor dvayoḥ

⁴⁴P. saṃtāpena hi D. sa dāyena hi K. samatvo hanti

⁴⁵P. tasyānuśayamūlasya D.,K.: tasyānugatamūlasya

⁴⁶P. tyāgāpramādākṛtīnā D.,L.: yogaprasādāt kṛtīnā Ca. tyāgāḥ pramādaś ca ākṛtīḥ śarīraṃ yasya / yogaprasādākṛtīnā iti pāṭho lekhaḥapramādāt /

⁴⁷P. kāmasya kevalam parikarṣaṇam D. kāmasya kevalasya nivartanam K. kāmasya kevalam parisarpanam

⁴⁸P. vadham vai kāmāśāstrasya D. bandham vai kāma K. etac ca kāma Cn. vadham iti pāṭhe tyāgam /

⁴⁹P.,D.: sa duḥkhāny ativartate K. suduḥkhāny atrivartate

⁵⁰P.,K.: tatra buddheḥ D. tattvabuddheḥ

⁵¹P.,K.: janāḥ pauraś D. manāḥpaurāś Cn. (reading manāḥpaurāḥ) manasā amātyena pravartyā iti manāḥpaurā ity ucyante /

⁵²tadarthaṃ tu Ca.(reading purākṛtīḥ) tadarthaṃ indriyārthaṃ purasya śarīrasya ā samnatatobhāvena kṛtīḥ karaṇam / Cn. parā kṛtīḥ mahatī kriyā pravṛtīḥ /

⁵³P. sahapureśvarāḥ D.,K.: saha pureśvaraiḥ Ca.,Cn.: pareśvaraiḥ manobuddhyahaṃkāraiḥ /

⁵⁴P. yad artham upajīvanti D.,K.: tad artham upajīvanti

⁵⁵P.,K.: manāḥ sādharmyam ucyate D. manāḥ sāmānyam aśnute Ca. (reading manāḥsādharmyam) manaso 'pi sādharmyam buddhi-sādrśyam rajastamo'nabhibhavanīyatvam ucyate / Cn. (reading manāḥsāmānyam) dudharṣāpi doṣakaluṣitena manasā saha samanānatvaṃ bhajate /

⁵⁶P.,D.: manastrastās K. manastptās

⁵⁷P. na so 'rthaḥ pariśidati D.,K.: so 'narthaḥ pariśidati K.はこの後に次の一行を挿入している。

pauramantraviyuktāyāḥ so 'rthaḥ saṃśidati kramāt /

⁵⁸P. pṛthagbhūtaṃ yadā buddhyā D.,K.: pṛthagbhūtaṃ mano buddhyā

⁵⁹P. tatraīnam vivṛtaṃ D. tatraīnam vidhṛtaṃ K. tatraīnam vikṛtaṃ Cn. enam ātmānam / vidhṛtaṃ pratibimbarūpeṇasthāpitam /

- (1) 息子よ、島で生まれた者(ヴィヤーサ)の口より大いなる歓喜とともに⁶⁰発せられた元素(bhūta)の属性の列举を⁶¹もう一度聞くべし、罪なき者よ。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.163, parisamkhyāna, Sixty Constituents)
- (2) 燃えている火の如き尊者は(かつて)、煙(におおわれた)光輝をもつ者(息子)に対して⁶²語った。それ故私もまた、息子よ、もう一度その教えを語ろう。
- (3) 地(の元素)には、不動性(sthairya)、広さ⁶³、硬さ(kāṭhinya)、生産性⁶⁴、香り、重さ⁶⁵、力能⁶⁶、集合性(samghāta)、支持力、堅固さが(属性として)ある⁶⁷。(Cf.Hopkins[Great Epic] pp.163-165, Sixty Constituents of Intellect)
- (4) 水には、冷たさ、味、湿性(kleda)、流動性、油性と冷やかさ(sneha-saumyatā)、舌、飛散(vishyandinī)、そして地からなるものや水を含むものへの流入⁶⁸が(属性として)ある。
- (5) 火(の元素)には、近づき難きこと⁶⁹、輝き、熱さ、焼くこと(pāka)、照明⁷⁰、清浄さ⁷¹、愛情(rāga)、軽さ、鋭さ、そして十番目として上昇⁷²が(属性として)ある。
- (6) 風には、一定しないこと、接触⁷³、言葉の(発生する)場所⁷⁴、独立性(svatantratā)、力、すばやさ、気絶⁷⁵、運動、行為を為すこと⁷⁶、誕生⁷⁷が(属性として)ある。。
- (7) 虚空の属性は、音声、遍在性(vyāpitva)、間隙(chidratā)、無依所(anāsraya)、無基体⁷⁸、非顕現(avyakta)、無変化⁷⁹、
- (8) そして、非抵触性、元素性と変異である⁸⁰。以上、五元素の本性として存在する⁸¹五十の属性が述べられた。(Cf.Hopkins[1902] p.120, pañcāśatam)
- (9) 移動と推理、区別⁸²、創造、願望、忍耐⁸³、善、不善(?)、迅速さ⁸⁴が思考器官(manasa)の九種の属性である。
- (10) 望ましいことと望ましくないことの分別⁸⁵、決定(vyavasāya)、瞑想(samadhitā)、疑問、洞察の五種が認識器官(buddhi)の属性である⁸⁶。

⁶⁰ ślāghayā parayā Cs. ślāghayā śraddhāyā /

⁶¹ P.,K.: guṇasamkhyānam D. parisamkhyānam

⁶² P. dhūmravarcase D. dhūmavarcase K. dhūmavatsalaḥ

⁶³ P. pṛthū D.,K.: gurutvam

⁶⁴ P.,K.: prasavātmā D. prasavārthatā Ca. prasavātmā tṛṇādijanakatā / Cn. (reading prasavārthatā) prasavo dhānyādyutpattis tadarthatā /

⁶⁵ P.,D. gurutvam K. bhāras ca

⁶⁶ śaktiś ca Ca. (reading saktiś) saṅgāt piṇḍībhāvaḥ / Cn. śaktiḥ gandhagrahaṇasāmarthyam /

⁶⁷ sthāpanā dhṛtiḥ Cn. sthāpanā manuṣyādyāśrayatvam / dhṛtiśabdenātra bhūtāntarapravesasthānatvam ucyate /

⁶⁸ P. jivhā viṣyandinī caiva bhaumāpyāsravaṇam tathā / D.,K.: jivhā viṣyandanam cāpi bhaumānām śrapaṇam tathā

⁶⁹ P. durdhasatā D.,K.: durdhasatā P. の durdhasatā は意味不明のため、D.,K. の durdhasatā を探る。Duessen: unbezwingenkeit

⁷⁰ prakāśanam Cs. prakāśanam cakṣurindriyam /

⁷¹ P.,K.: śaucam D. śoko

⁷² P. ūrdhvabhāgitā D.,K.: satatam cordhvabhāgitā

⁷³ P. aniyamaḥ sparśo D.,K.: aniyamasparśo Ca. aniyamaḥ anuṣṅāśīta ity arthaḥ /

⁷⁴ vādasthānam Cn. vādasthānam vāgindriyagolakāni /

⁷⁵ P. mohaś ca D.,K.: mokṣam ca Cn. mokṣam mūtrādeḥ /

⁷⁶ P. ceṣṭā karmakṛtā D.,K.: karma ceṣṭātmā

⁷⁷ bhavaḥ Cn. bhavo janmamarāṇe /

⁷⁸ anālambanam Cs. anālambanatvam yathā śarīre bhūtāntaram bhūtāntarasyālambanam, na tathākāśaḥ /

⁷⁹ avikāritā Cn. avikāritā dravyāntarānārambhakatvam / Cs. ekasvarūpatā /

⁸⁰ P. apratīghātātā caiva bhūtatvam vikṛtāni ca D. apratīghātītā caiva bhūtatvam vikṛtāni ca K. apratīghātītā caiva śrotṛtvam vivarāṇi ca Ca. (reading bhūtatvavikṛtāni ca) bhūtadvārakṛtāḥ upātāḥ / Cn. bhūtatvam śrotrendriyopādānatvāt / vikṛtāni dehāntargatacchidrāṇi /

⁸¹ pañcabhūtātmabhāvitāḥ Cn. pañcabhūtātmabhāvitāḥ pañcānām bhūtānam ātmā, prāṭisvikam svarūpam, tatra lakṣitāḥ /

⁸² P. calopapattir vyaktiś ca D. dhairyopapattir vyaktiś ca K. phalopapattir vyaktiś ca Ca. calā calanam, upapattir yuktiḥ, vyaktiḥ jñānakāraṇatvam / Cp. calāśabdaś calatve, upapattir yuktiḥ niścayayogyatā, vyaktiḥ padārthajñānam / N. vyaktiḥ smaraṇam /

⁸³ visargaḥ kalpanā kṣamā Ca.,Cp.: visargaḥ nyāsaḥ (Cp. tyāgaḥ anapekṣitasya, kalpanā nāmājātyādi, kṣamā krodhādisamanam / Cn. visargaḥ viparītāḥ sargo bhrāntiḥ, kalpanā manorathavṛttiḥ /

⁸⁴ sad asad āśutā Ca. sat prakāśakatvāt bhāsanam, asad aprakāśakatvād abhāsanam / Cn. sat vairāgyādi, asat rāgadveśādi, āśutā asthiratvam /

⁸⁵ P. iṣṭāniṣṭavikalpaś ca D.,K.: iṣṭāniṣṭavipattis ca

⁸⁶ P. buddhau pañceha ye guṇāḥ D. buddheḥ pañcaguṇān viduḥ /

ユディシュティラは言った。

- (11) どうして認識器官には五種の属性があり、どうして五種の感官は属性なのか。父よ、この微妙な知識のすべてを語るべし。

ビーシュマは言った。

- (12) (認識器官の) 属性は六十と言われている⁸⁷。それらは、元素によって限定され、常に(認識器官に) 附着している⁸⁸。そして元素に附着しているもの(属性)は⁸⁹不滅なもの(akṣara)によって創造されたのである。しかし、息子よ、世間では、人々はそれを恒常とは言わない⁹⁰。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.164, translation; p.355, metre)

- (13) 息子よ、伝承なく述べられたものは⁹¹思弁によって作られている⁹²。汝は今や元素というものの真理をすべて会得して、元素の光輝によって⁹³心(buddhi)静かにあるべし。

[248章]⁹⁴(D.256章, C.9144-9164, K.262章)

ユディシュティラは言った。

- (1) これら大地の守護者たる偉大な力をもつ者たちが戦いの最中に命を失い⁹⁵地上に横たわっている。
- (2) 一人一人、恐ろしい力を持ち、また多くの象(nāga)に匹敵する力をもつこの者たちが、戦いにおいて等しい精神力と腕力(tejobala)をもつ者によって殺された。
- (3) この者たちを戦いにおいて殺す者を、私はこれまで⁹⁶見たことがない。勇気(vikrama)を具し、精神力と腕力を備えた者たち、
- (4) 偉大な英知をもつものよ⁹⁷、今や、これらの者たちが、息なく横たわっている。これら息なき者たちに「死んだ」という語が用いられる(vartati)。
- (5) これら恐ろしき勇気をもつ王たちはほとんどが死んだ。このことに関して私に疑問が生じた。「彼らは死んだ」という表現はどこから来るのか。
- (6) だれに死があるのか。どこから死は来るのか。どのようにして死はこの世で人々を連れ去るのか、神のごとき者よ。それを私に語るべし、祖父よ。

ビーシュマは言った。

- (7) かつてクリタ・ユガ期に、若者よ、アヴィカンパカという王がいた⁹⁸。彼は戦いにおいて馬車をこわされ、敵の支配に落ちた。

⁸⁷ ṣaṣṭiṃ bhūtaguṇān Ca. bhūtānāṃ pañcāśat, manaso nava, buddher eko 'dhyavasāya eveti ṣaṣṭir evaguṇāḥ / Cn.(reading buddhiguṇān vai) pañcabhūtāny api buddher eva guṇāḥ, pūrve ca pañcapañcāśad iti ṣaṣṭiṃ buddhiguṇān āhuḥ /

⁸⁸ P.,D.: bhūtaviśiṣṭā nityaviśaktāḥ K. bhūtaviśaktān prakṛtivistṣṭān Cs. nityaviśaktāḥ yāvad dravyabhāvinah /

⁸⁹ P. bhūtaviśaktās D. bhūtavibhūtīs K. nityaviśaktāṃs Ca. bhūtaviśaktāḥ sadā sambaddhāḥ / cakāraṇ manobuddhyor api ete sarve akṣareṇa īsvareṇa sṛṣṭāḥ / Cn.(reading bhūtavibhūtīr) bhūtāni pañca tadibhūtayaś ca manobuddhibhyāṃ saha uktā ekaṣaṣṭir ity ekasaptatim padārthān akṣareṇa brahmaṇā praśāsitrā sṛṣṭān vadanti /

⁹⁰ na nityam tad iha vadanti Ca. na nityam, teṣāṃ pralaye mokṣe ca vilayāt /

⁹¹ uktam anāgataṃ vai Cn. anāgatam, anāgamaṃ vedaviruddham, anyir vādibhir uktam / Cv. anāgatam, kenāpy ajñātam /

⁹² P. tat putra cintākalitaṃ D. tat putra cintākalilaṃ K. tat putracintākalilaṃ / Cn. cintākalilam, vicāro duṣṭam Cp. cintākalitaṃ cintānīyam /

⁹³ bhūtaprabhavād Cn. bhūtaprabhavāt brāhmaīśvaryaḥ /

⁹⁴ 248-250章に見られる「死の起源説話」については、de Jong[1985]; ヴィンテルニッツ『叙事詩とブラーナ』中野義照訳 p.342 注 184 参照。

⁹⁵ P.,K.: gatasattvā D. gatasamjñā

⁹⁶ P.,K.: purā D. param

⁹⁷ P. mahāprājñā D.,K.: mahāprājñāḥ

⁹⁸ P. rājā āsīd avikampakaḥ D.,K.: rājā hy āsīd akampakaḥ

- (8) その息子はハリという名で、力はナーラーヤナに匹敵した。彼は戦いにおいて手勢や従者共々敵によって殺された。
- (9) かの敵の支配に落ちたる王は息子への悲しみに満たされ、まったく心が安らぐことはなかった⁹⁹時、たまたま地上にいるナーラダ仙を見た。
- (10) 人々の支配者たる彼はナーラダ仙に起こったままにすべてを語った。敵によって戦いにおいて捕らえられたこと、そして息子の死を。
- (11) 熱力に富むナーラダ仙は、彼のその言葉を聞くと、息子への悲しみを除くために次のような話を語った。
- (12) 王よ、今やこの詳細な話を聞くべし。起こった通りに私も¹⁰⁰聞いたこの話を、大地の支配者よ。
- (13) 生き物の創造の時、大威光ある祖父は生き物を創造した後、大変に増え多くなった生き物をもはや放置できなかつた¹⁰¹。
- (14) なぜならば、生き物にはどこにもどんな空間もなかつたのである、不動の者よ。三界に住む者は呼吸できないほど (iva) 密着したのである、王よ。
- (15) 彼には帰滅 (saṃhāra) に関する考えが生じた、大地の王よ。考えつつも、帰滅の原因となるもの (hetukāraṇa) に思い至らなかつた。
- (16) 彼の怒りによって (身体の) もろもろの穴 (khebyo) から火が生じた。大王よ、かの祖父は、それによってすべての方角を焼いたのである。
- (17) そして、至尊者 (bhagavat) の怒りより生じた火は天空、大地、中空を、そして動くものと動かぬものを含む世界を焼いた。
- (18) そこで、偉大な祖父が怒った時、大きな怒りの激流 (vega) によって、もろもろの動不動の生き物 (bhūta) が焼かれたのである。
- (19) そのあと、黄色い巻髪をし¹⁰²、ヴェーダ祭式の主宰者であり、吉祥にして、敵の英雄を殺す神スターヌ (棒状のもの) は、ブラフマー神に保護を求めた。
- (20) 生き物の幸福を願ってスターヌが近づいたとき、恩寵を与える神は光を発しつつ (jvarann iva) 吉祥なる神 (スターヌ) に語った。
- (21) 今日は、いかなる望みをかなえようか。汝は (私の) 恩寵に値するものと私は思う。私は汝の心の中にある好ましきこと (善) を為すであろう、慈悲ある者よ。

[249 章] (D.257 章, C.9165-9186, K.263 章)

スターヌは言った。

- (1) 生き物の創造に関連して、私のこの願いを知るべし、主よ。これら (生き物は) 汝によって創造されたのである。祖父よ、これら (の生き物) に怒るなかれ。
- (2) 神よ、汝の怒り (tejas) から生じた火によって生き物たちはすべて焼かれている¹⁰³。彼らを見て、私には慈悲が (生じた)。これら (生き物) に対して怒るなかれ、世界の主よ。

ブラジャーパティは言った。

- (3) 私は怒ってはいない。また「生き物は存在すべきでない」¹⁰⁴というのは私の望みでもない。しか

⁹⁹ aśāntiparo Cs. aśāntipara iti padam /

¹⁰⁰ P., K.: mayāpi D. mayedaṃ

¹⁰¹ nāmṛṣyata 「生き物が増えたことに耐えられなかつた」か。Deussen: da wollte er es nicht dulden, daß....

¹⁰² P. harijātaḥ D. adhvarajātaḥ K. haro jātaḥ Cn. adhvaraḥ 'dhvṛ hiṃsāyām' ahiṃsaiva jāta iva śirasi dhāryatvena mānyā yasya so 'dhvarajato dayāluḥ / Cs. adhvarā jyotiṣtomādayaḥ sapta, ta eva jāta mūrthasthāḥ keśā yasya / anena yajñarūpatvam uktaṃ bhavati /

¹⁰³ dahyanti Parasmaipada が Passive の意味に用いられているのは、韻律の要請か (d 句第一音節)。 (Cf. MBh. XII.170.18, 171.56, 268.4, dahyati)

¹⁰⁴ P. bhaveran D., K.: bhavyeḥ

し、大地の(負担)軽減のために(生き物の)帰滅が望まれるのである。

- (4) いつも重荷に苦しむこの(大地の)女神は、私を帰滅のためにせかせたのである、偉大な神よ。(というのは)重荷によって水の中に沈んでしまう¹⁰⁵からである。(Cf. de Jong[1985] p.398)
- (5) 心を用いて(buddhyā)様々に考えたが、これら増殖した(生き物)の帰滅まで思い至らなかった時、怒りが私にとりついたのである。

スターヌは言った。

- (6) 帰滅の終りには寂靜たるべし、怒ることなかれ、天界の自在者よ¹⁰⁶。生き物、すなわち動くものも動かぬものも、滅することなかれ¹⁰⁷。
- (7) そしてあらゆる池(palvala)、あらゆる草と蕪¹⁰⁸、動くものと動かぬもの、そして四種の生き物の群を¹⁰⁹(滅することなかれ)。
- (8) このように¹¹⁰焼かれて世界はすべて灰になった。「至尊者よ、聖者よ、寂靜であれかし」、これが私が選んだ恩寵である。
- (9) というのは、これら生き物はいったん消滅すると再び戻ることはないからである。それ故、まさに自らの威力(tejas)によってこの火を¹¹¹止めるべし¹¹²。
- (10) これら¹¹³すべての生き物が再び生き返る¹¹⁴ような他の方法を、生き物の幸福のために考えるべし¹¹⁵、敵を破壊する者よ¹¹⁶。
- (11) 誕生のなくなった生き物は消滅に(abhāvam)至るであろう¹¹⁷。私は、この世界において(上座の)神であること(adhidaiva)を¹¹⁸汝によって付与されている、自在者よ¹¹⁹。
- (12) なぜならば、世界の保護者(jagannātha)よ、世界の動くもの動かぬものは¹²⁰汝より生じたのである。偉大なる神よ¹²¹、私は、汝を静めた後、生き物が回帰によって生まれる¹²²ことを願う。

ナーラダ仙は言った。

- (13) スターヌの言葉を聞いて、神は、言葉と心を抑制し、その火を再び自ら¹²³精神力によって¹²⁴停止した。

¹⁰⁵P, D.: nimajjati K. nimajjati

¹⁰⁶P. samhārāntaṃ prasīdasva mā krudhas tridaśa.Īśvara D. samhārārthaṃ prasīdasva mā krudho vibudheśvara K. samhārāt tvaṃ nivaratasva mā krudho vibudheśvara

¹⁰⁷P. vinīnaśaḥ D. vyanīnaśat K. vyanīnaśaḥ D.K. に見られる mā + augmented aorist については、Speier, Sanskrit Syntax, p.274.14; ゴンダ [1995] p.252,c 参照。

¹⁰⁸ṭṭṇolapam Cn. ulapam api ṭṭṇaviśeṣaḥ /

¹⁰⁹bhūtagrāmaṃ Cs. grāmaśabdasya napuṃsakatvam āraṣam /

¹¹⁰P, D.: tad etad K. akāle

¹¹¹P. etad tejas D.,K.: etat tena

¹¹²P. nivartyatām D., K.: nivartatām

¹¹³P. yatheme D.,K.: yathā 'mī

¹¹⁴P. nivarteran D.,K.: na dahyeraṇ Ca. vivarteran, janmamarāṇaprabandhena punaḥ punar āvartera / dahyeraṇ iti pātaś cintvaḥ / Cs. (reading nivarteran) yugapatsamhārān nivarteran ity arthaḥ /

¹¹⁵P. nivarteran D.,K.: na dahyeraṇ

¹¹⁶P. paraṃtapa D., K.: pitāmaha

¹¹⁷P. abhāvam abhigaccheyur utsannaprajananāḥ prajāḥ / D. abhāvaṃ hi na gaccheyur ucchinaprajananāḥ prajāḥ / K. abhāvaṃ hi na gaccheyur utsannaprajananāḥ prajāḥ /

¹¹⁸P. adhidaivayukto D.,K.: adhidaive yukto N. adhidaive ahaṅkāradhiṣṭāṭṭṭve adhyātman adhibhūtaṃ cādhipaivaṃ ca śrūyatām (MBh.XII.300.17)

¹¹⁹P. lokeṣv iheśvara D. lokeṣvareśvara K. lokahitepsunā K. は ab 句の後に次の句を挿入して3行詩としている。

putratvenānusaṅkalpye tadāhaṃ tapya dānavaiḥ /

¹²⁰P. jagatsthāvaraṅgamam D.,K.: etat sthāvaraṅgamam

¹²¹mahādeva Ca. mahādeveti rudreṇa brahmasaṃbodhanam /

¹²²āvṛttijāḥ Cn. āvṛttijāḥ, āvṛtyā jātaḥ / mṛtvā mṛtvā punar jāyantām ity arthaḥ /

¹²³P. svaṃ D.,K.: san

¹²⁴P. antarātmanā D., K.: antarātmani

- (14) それから、世間によって崇められる至尊なる主は、火を収めた後、誕生と死について¹²⁵考えた。
- (15) 怒りより生じた彼の火を引っ込めると、その時、その偉大な神のあらゆる (感官の) 穴を通して¹²⁶一人の女 (nārī) が現われた。
- (16) (女は、)色黒く、赤い着物を着て¹²⁷、赤い目と掌をもち¹²⁸、天の耳輪をつけ、天の飾りで身を飾っていた。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.186, death a femail; p.221, vipulā (b 句); p.417, parallel phrases No.113 (cd 句))
- (17) 彼女はもろもろの (感官の) 穴を通して生じた後、(神の) 右側に立った。その時、このすべてを支配する二柱の神は両者とも少女 (kanyā) を見た。
- (18) その時、世界の始まり (ādi) であり、自在なる神は、彼女に、「死よ」と呼びかけた。「大地を護る者よ、この生き物どもを殺すべし。
- (19) なぜなら汝は、私の「帰滅」への意識 (saṃhārabuddhi) と怒りとによって考え出されたのであるから。従って、汝は愚者賢者ともどもすべての生き物を滅すべし。
- (20) 汝は生き物を区別なく滅すべし、可愛い娘よ¹²⁹。なぜならば汝は私の命令によって (niyogena) この上なき幸福に至るであろうから。」
- (21) このように言われて、蓮を首飾りとする幼い死の女神は、苦しみ、涙を流して深く¹³⁰沈み込んだ。
- (22) 人の主は¹³¹、人々の幸福のために、両手でその涙を受け取り¹³²、さらにもう一度¹³³頼んだ。

[250 章] (D.258 章, C.9187-9228, K.264 章)

ナーラダ仙は言った。

- (1) たいへんに長い目をした¹³⁴彼女は力を失ったが、苦しみを抑えて、合掌して蔓のように身を屈めて¹³⁵言った。
- (2) なぜ汝は私のような女を創造したのか、語り手の中のすぐれた者よ。あらゆる生き物に恐れを引き起こし、恐ろしき行為に生まれついたような私を。
- (3) 私はダルマにかなわないことを恐れる。私にとってダルマにかなった行為を示すべし。自在者よ¹³⁶、吉祥なる目によってこの恐れたる私を見るべし。
- (4) 幼き者、年老いた者、活力ある者たちを、そして罪なき生き物を私は奪い去ることはできない。生き物の主よ、私は汝に帰敬する。私に恩寵を与えよ¹³⁷。

¹²⁵pravṛttiṃ ca nivṛttiṃca Cn. pravṛttiṃ janma, nivṛttiṃ maraṇam / anena nātyantaṃ prajānām ucchedo nāpy atyantaṃ bhmer bhāra iti darśitam /

¹²⁶viśvebhyaḥ khebhyo Ca. viśvebhyaḥ khebhyaḥ sarvebhyo mukhanāsikādibhyaḥ / Cs. khebhyo nārīty anena kuto mṛtyor asyottaram /

¹²⁷P. kṛṣṇā raktāmbāradharā D.,K.: kṛṣṇaraktāmbāradharā

¹²⁸P. raktanetratalāntarā D.,K.: kṛṣṇanetratalāntarā antarā は「ほとんど」の副詞か。 Deussen: mit schwarzen Augen und schwarzen inneren Handflächen

¹²⁹P. bhāmini D., K.: kāmīni

¹³⁰P. atīva hi D.,K.: atīva ca

¹³¹janeśvaraḥ Ganguli, Deussen はこれを vocative に理解している。

¹³²jagrāha tāny aśrūni Cn. mṛtyor aśrūpāte yugapatsarvabhūtaksayo mā bhūd iti bhāvaḥ / 死神の涙については、Minoru Hara, *Hot Tears and Cold Tears*, Purāṇa-Itihāsa-Vimarsaḥ, Prof.S.G.Kantawala Felicitation Volume, Delhi, p.342-350 参照。

¹³³P. punar eva ca D.,K.: punar eva ha

¹³⁴P. tv atīvayatekṣaṇā D.,K.: tmanaiṅvāyatekṣaṇā

¹³⁵P. latevāvarjitā tadā D.,K.: tam evāvarjitā tadā Ca. āvarjitā praṇatā / Cn. rjubhūtā / Cp. bhūmau patitā /

¹³⁶P.,K.: īśvara D. īkṣasva

¹³⁷P. namas te 'bhīprasīda me D.,K.: namas te 'stu prasīda me

- (5) (彼らは) そのように死んだ愛しき息子たち、活力ある兄弟たち、そして母たち・父たちを呪うことになろう¹³⁸、神よ。私は (そのような) 彼らを¹³⁹恐れるのである。
- (6) 悲しみの涙に濡れた者は、永遠の年月、私を焼くであろう。(それゆえ) 私は、彼らをひどく恐れ、あなたに保護を求めてやってきた。
- (7) 罪を為した者は、ヤマの住処に行かしめられるのである¹⁴⁰、神よ。望みをかなえる者よ、私は汝に恩寵を求める。私に恩寵を与えるべし、威光ある者よ。
- (8) 私は汝からこのような愛を望む、世界の祖父よ。また汝の恩寵のためならば¹⁴¹苦行を行うことさえ望むであろう、神の主よ。

祖父は言った。

- (9) 死よ、汝は生き物の帰滅のために私によって構想されたのである¹⁴²。行け。全ての生き物を帰滅させよ。ためらってはならない。
- (10) このようになったのは必然なのであって、それ以外にはなりようがないのである。美しい姿の者よ、言われたように私の言葉を実行すべし、罪なき者よ。

ナーラダ仙は言った。

- (11) 死神は、このように言われて、長い腕を持つ者よ、敵の城砦の征服者よ、言葉を発しなかった。そして、腰を屈めたまま、至尊者の方に顔をあげて立っていた。
- (12) 何度も何度も (そのように) 言われて、美しい彼女は死んだかのようにであった (gatasattveva)。すると神々の神であり¹⁴³、自在者の中の自在者は沈黙した。
- (13) 実に、自己によって自己をもつ¹⁴⁴ブラフマー神は、おのずから満足した。そして世界の支配者たる彼は、微笑みつつもろもろの世界をすべて見回した。
- (14) 敵なき至尊者の怒りが停止したので、その娘は彼の近くから去った¹⁴⁵、と我々は聞いている。
- (15) 死は、その時逃げ出し、生き物の帰滅を約束することなく、急いでデーヌカに¹⁴⁶に赴いたのである¹⁴⁷、王の中ですぐれた者よ。
- (16) そこでその女神は困難な最高の苦行を行った。すなわち十五兆年¹⁴⁸片足で立ったのである。
- (17) そこでそのような最高の困難な苦行を行っている女神に、再び、大きな威光をもつブラフマー神は話しかけた。
- (18) 「死よ、私の言葉を実行すべし。」その言葉に注意を払わず、彼女はただちに再び同じように片足でもう七兆年、
- (19) 六兆年、五兆年、二兆年立ったのである、名誉を与える者よ。さらに一万兆年獣たちと共に行動した¹⁴⁹。

¹³⁸P. apadhyāsyanti yad deva mṛtāṃs D.,K.: apadhyāsyanti yady evaṃ mṛtās Cn.Cp.: apadhyāsyanti śapyante /

¹³⁹P.,D.: teṣāṃ K. tebhyo

¹⁴⁰P. yātyante D.,K.: pātyante

¹⁴¹P.,K.: tvatprasādāc ca D. tvatprasādārthaṃ

¹⁴²P.,D. mṛtyo saṃkalpitā me tvam prajāsaṃhārahetaṇā K. tvam hi saṃhārabuddhyā me cintitā ruṣitena ca cf. MBh. XII.249.19

¹⁴³P.,D.: devo devānām K. devo lokānām

¹⁴⁴P. ātmanātmavān D.,K.: ātmanātmani

¹⁴⁵P. apajāgāma D.,K.: atha jagāma

¹⁴⁶dhenukam Ca.Cs.: dhenukam dhenukāśramam / Cn.,Cp.: dhenukam goṭrthaṃ māyāntarvarti / Cf. MBh. VII.55.17

¹⁴⁷P. abhyayāt D.,K.: abhyagāt

¹⁴⁸padmāni Ca. padmam trayodaśāṅka evaikasmād daśagunavṛddhyā / pañcadaśo 'nkaḥ padma ity apare /

¹⁴⁹D.,K. はこの後に次の句を挿入し、第 20 詩節の ab としている。従って、以後 P. とは 1 行づつずれる。

dve cāyute naraśreṣṭha vāyvāhārā mahāmāte /

- (20) それで済んで (gatvā) 再び、水中で七千年そしてまた千年と彼女は最高の沈黙を行じたのである、大地の主よ。
- (21) そこからその少女はカウシキー川に¹⁵⁰行き、雄牛のごときバラタ族よ¹⁵¹、そこで風と水を食物として再び制戒 (niyama) を行った。
- (22) そこから大きな幸運を持つ少女は一人でガンガー川とメール山に行った。(そこで) 彼女は、生き物の¹⁵²幸福のために、杭のごとく動かずに立ったのである。
- (23) それから、神々が祭式を行ったヒマラヤ山の頂上で (彼女は) それからもう十億年¹⁵³片足の親指で立ち、努力して祖父 (Prajāpati) を満足させた。
- (24) すると彼女にもろもろの世界の生成と帰滅であるもの (祖父) は¹⁵⁴言った。「どうしたのだ¹⁵⁵、娘よ。私のあの言葉を¹⁵⁶実行すべし。」
- (25) すると再び、死は至尊なる祖父に言った。「生き物を殺すことはできない、神よ。再び私は汝に¹⁵⁷恩寵を求める。」
- (26) アダルマの恐れに震え¹⁵⁸、再び懇願する¹⁵⁹娘を制止して¹⁶⁰、神の中の神はその時次の言葉を語った。
- (27) 「死よ、汝にとってアダルマは存在しない。美しき者よ、この世の生き物を殺すべし。私が意味なく語ることは、この世では決して生じないのである、娘よ。」
- (28) 永遠なるダルマが、この世で汝に従うであろう¹⁶¹。私も賢者たちも常に汝の幸福を喜ぶものである。
- (29) (汝の) 心によって願われた願望は、それが何であれ、私は汝に与えよう¹⁶²。生き物 (が汝のところへやってくるの) は、病気で苦しむためであって¹⁶³、汝の罪によってやって来ることはないであろう¹⁶⁴。
- (30) 汝は男においては男の姿として¹⁶⁵存在するであろう。女においては女の姿を持つものとなろう。第三の人々においては、非男女として (存在するであろう)。
- (31) このように言われた彼女は合掌して、大王よ、偉大な不変なる神の支配者に、「できない」と言ったのである。
- (32) すると神は彼女に言った。「死よ、人間を帰滅させよ、汝にアダルマは生じることはない。そのように私は瞑想しよう、美しき者よ。」
- (33) 私はかつて涙の滴が落ちるのを見た。それは汝の目の前に (私の) 両手で保たれている。その涙の滴は、恐ろしい姿をした病気として、(死の) 時が至れば、人間を苦しめるであろう¹⁶⁶、死よ。

¹⁵⁰P. kauśikīm Cn. kauśikīm gaṇḍakīm nadīm / Cf.Sörensen[Index]p.399

¹⁵¹P. bharatarṣabha D.,K.: nṛpasattama

¹⁵²P. bhūtānām D.,K.: prajānām

¹⁵³P.,D.: nikharvam aparaṃ tataḥ K. nikharvam acarat tapaḥ Ca. nikharvam dvāḍṣoṅkaḥ /

¹⁵⁴P.,D.: lokānām prabhavāpyayaḥ K. lokānām prapitāmahaḥ

¹⁵⁵P.,D. kim idaṃ vartate K. kim idaṃ vartase

¹⁵⁶P. tadvaco mama D.,K.: mama tadvacaḥ

¹⁵⁷P.,K.: punas tvāhaṃ D. punas cāhaṃ

¹⁵⁸P. adharmabhayatrastām D.,K.: adharmabhayād bhūtām

¹⁵⁹P. punar eva ca yācatīm D.,K.: punar eva prayācatīm

¹⁶⁰nigṛhya N. nigṛhya haṭhaṃ kṛtvā /

¹⁶¹P. anupraveksyate D.,K.: anupraveksyati

¹⁶²P. dadāmi D.,K.: dadāni

¹⁶³vyādhisaṅpīḍitāḥ Ca. (reading vyādhiniṣpīḍitā) vyādhiniṣpīḍitā iti vadan vyādher eva dūṣaṇaṃ dāsyanti na taveti brahmā svābhirāyam āviścakāra /

¹⁶⁴na tvā doṣena yāsyanti N. tvayi doṣaṃ na vadiṣyantīty arthaḥ

¹⁶⁵P.,K.: ca rūpeṇa D. svarūpeṇ

¹⁶⁶P.,K.: pīḍayisyanti D. kālayisyanti

- (34) 汝は、あらゆる生き物 (prānin) の最後の時に、(汝の) 欲望と怒りを共に (彼らに) 結びつけるべし。そうすればダルマは、数限りなく¹⁶⁷汝のところにやって来るであろう。そして、(以前と) 同じ振舞いをしても汝がアダルマを得ることはないであろう。
- (35) そして、汝はその時言われた (athoktaṃ) ダルマを守り、自分をアダルマの中に沈めることはないであろう。それ故、汝は (汝に) やってきた願望を¹⁶⁸好むべし。そして、(それを生き物に) 結びつけた後、この世にいる生き物を帰滅させよ。
- (36) その時彼女は、死 (mṛtyu) という名称に示された呪いに恐れて¹⁶⁹、「承知しました」と彼に言った。それから、彼女は、生き物の終わりの時に、氣息に欲望と怒りを与え、(生き物を) 混乱させて、殺すのである¹⁷⁰。
- (37) 死の女神ムリトゥユの涙の落ちることが人間の病氣であり、それによって人間の身体は壊される¹⁷¹。それゆえ、あらゆる生き物の最後の呼吸に際しては、心で悟って、悲しんではならない。
- (38) 生き物の最後の呼吸において、あらゆる神々は¹⁷²去り、巡り (vṛtta)、そして帰って来る (samnivṛtta)。同様に、あらゆる人間は最後の呼吸において去り、神と同様、再び帰って来るのである¹⁷³、獅子のごとき王よ。
- (39) 恐ろしい音をした大勢力の恐ろしい風は¹⁷⁴、あらゆる生き物の生気であり、個我 (dehin) の身体の分離に際して様々に作用する¹⁷⁵。従って、風こそがすぐれた神々の神である。(Cf.Hopkins[Great Epic] p.319, śālinī metre, vv.39-41)
- (40) あらゆる神々は人の相 (martyasaṃjñā) によって特徴づけられ、あらゆる死すべき者たちは神の相 (devasaṃjñā) によって特徴づけられている。それ故、(死せる) 子息を嘆くなかれ、獅子のごとき王よ。汝の子息は天界に¹⁷⁶達し、悦んでいる。
- (41) このように神によって創造された死の女神は、生き物に時が至ると然るべく帰滅させる。彼女の落涙が生き物の病氣であり、時が至ると、(病氣が) この世から人々を奪い去っていくのである。

(2001年12月17日 受理)

¹⁶⁷P.,D.: ameyo K. amogho

¹⁶⁸kāmaṃ Ca.: kāmam asmadabhimatam / abhyāgataḥ yaḥ prajāsaṃhāraḥ tam / Cp. abhyāgataṃ abādhyatvena prāptam /

¹⁶⁹P. mṛtyusaṃjñāpadesāc chāpād bhītā D. mṛtyusaṃjñāpadesād bhītā śāpād K. mṛtyusaṃjñā kṛtā stī śāpād bhītā

¹⁷⁰P.,D.: nirmohya hanti K. nityaṃ nihanti

¹⁷¹P.,D.: rujyate K. yujyate

¹⁷²P.,K.: devāḥ D. jīvāḥ Cn. devāḥ indriyāṇi / Cs. devāḥ ājānadevāḥ karmadevās ca /

¹⁷³P.,(D.): gatvāvṛttā K. gatvā vṛttā

¹⁷⁴vāyuh Cn. vāyuh pañcavṛttiḥ prāṇaḥ /

¹⁷⁵P.,D.: nānvṛttir dehinām dehabhede K. anāvṛttir dehinām dehapāte N. nānvṛttir nānadehagataḥ etena dehasyaiva mṛtyur na prāṇānām ātmano vā /

¹⁷⁶P.,K.: svargaṃ D. sargaṃ